



頭で考えたことと実際に挑戦したことは違う

挑戦し、
失敗した者には
再挑戦の
輝きがある。
挑戦を避けた
新しい人生はない。
山岡太郎

日本のスポーツ界には、フィギアスケートの羽生結弦（はにゅうゆづる）、野球の大谷翔平、ゴルフの松山英樹など天才と呼ばれる人がいます。これらの人たちが、表現の仕方はちがっても異口同音（いくどうおん）なのは、実現するが難しいと一般に思われていることに「挑戦」する勇気をもつことの大切さです。

大谷翔平選手は、野球の世界最高レベルのメジャーリーグで、投手と打者の「二刀流」をやったのけました。投手で10勝すれば一流と呼ばれます。打者としてホームランを30本以上打てば一流と呼ばれます。これまでの常識では、プロのレベルでは、投手は投手だけの練習をして一流を、打者は打者だけの練習をして一流を目指します。高校・大学時代に両方優れていた人も、プロではどちらにするか決めます。この常識を覆（くつがえ）したのが大谷選手でした。周囲の人はもちろん、同じチームの中からさえも「それは無理」「どちらか一つにすれば、必ず超一流になるが、このままでは両方ともダメになってしまう」と猛反対の声が大半でした。そんな状況の中でも「二刀流」への挑戦を続け、日本のプロ野球だけでなく、世界最高峰の舞台上、自分のやってきたことが正しかったことを証明して、今年のMVP（最優秀選手賞）に輝いたのです。ちなみに大谷選手自身は「二刀流」という言葉は使わないそうです。「投手と外野手」と言い、「野球を精一杯、一生懸命やっているだけ」だと語ります。この言葉が嘘でないことは、ケガをしてしまうことの多い盗塁や走塁を恐れず、いつも全力でチームのためにプレーする姿から伝わってきます。これまでの常識では、ケガをしないようにするため、投手の盗塁やスライディング（滑り込み）はありえなかったのです。

「やってみて『ダメだ』とわかったことと、はじめから『ダメだ』と言われたことは、違います」。努力の天才と呼ばれるイチローの有名な言葉です。みなさんは、「そんなの無理」とか「どうせ僕／私にはできない」と、あきらめたり、投げ出したりしたことはないでしょうか。誰でもわかってはいることですが、何事も実際にやってみないことには、何も始まりません。何も起こりません。何も変わりません。ところが、人間は挑戦をする前に頭で考えて答えを出してしまうことがよくあります。挑戦する前に「そんなの無理」と思い、行動を起こすことをやめてしまうのです。しかし、頭で考えただけで出した答えと、実際に挑戦してみても出てきた答えには大きな違いがあるのです。たとえどんな結果になっても、挑戦した人だけが味わう、苦しみ・悲しみと喜び・感動、絶望と希望、孤独と絆（きずな）などが人生を豊かに彩（いろど）ってくれます。「大きな」ことでなくても、私たちの日々の生活の中にも、頭の中だけで考えて実際にやってみないことはたくさんあります。例えば、困っている人がいて、声をかけてあげたいなと思っても、実際に声をかけてあげられなかった。何か目標や計画を決めようと思ったけど、どうせ達成・実行できないと思ったのでやめた、などなど。とりあえず、実際に一歩を踏み出してみましよう。

今年度の入学式の式辞で話したことです。1年生のみなさんは覚えていますか？

誰もが不可能、無理と思っていることも、誰かができると、次々にそれに続けてできる人が現れてくるのです。昔、陸上競技で、「1マイル（約1600m）4分の壁」という言葉がありました。みなさんに分かりやすく言うと、その当時、1マイル（約1600m）の中距離走では、4分を切ることは不可能と言われていたのです。実際、32年もの間、4分を切るランナーは一人も現れませんでした。ところが、32年ぶりに、ある一人のランナーが3分台の記録を出したのです。すると、その1年間だけで、何と30人以上のランナーが3分台の記録を出したのです。簡単に、「そんなの無理」とか「どうせ僕／私にはできない」と言わないでください。本当は、がんばればできるのに、自分で勝手に限界を作っている、そう自分が思い込んでいただけかもしれないのです。中学校生活では、学習でも運動でも、少し難しいと思うことに、どんどん挑戦していきましょう。